松美堂活版印刷所

しょうびどうかっぱんいんさつじょ

かつて情報を大量に届けるための主役だった活版印刷は時代とともに衰退。しかし松美堂活版印刷所では、ある仕事がきっかけになり、印刷機が残り続けてきました。

守ったわけじゃない 必要だから ここにある

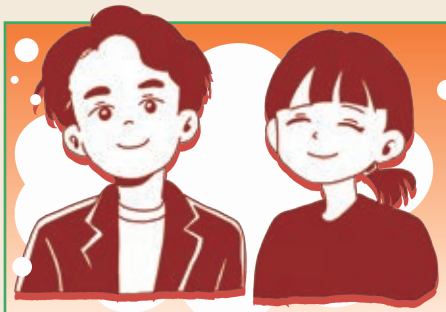


テキン

01｜活字４本、自転車でお届け

1965年、東京・赤羽で創業した『松美堂活版印刷所』。最初はテキンと呼ばれる手動の活版印刷機1台から始まり、仕事が増えるにつれて機械もだんだんと増えていきました。「近所の活字屋さんに、親父から頼まれて自転車で活字を取りに行っていたんです」

松美堂活版印刷所の社長である小河原大輔さんは現在も印刷機を動かしているお父様から、日々こんなお使いを頼まれていたそう。そんな何気ないエピソードからも、活版印刷が日常の仕事として根付いていた時代がうかがえます。



ショウビってどんな会社？

お二人にお話を伺いました！

代表取締役 小河原大輔さん

デザイナー 小河原はるかさん



松美堂活版印刷所（本社・工場）
〒115-0055　東京都北区赤羽西6-21-5

松美堂活版印刷所では、普通のコピー機ではなかなか印刷できない厚みの紙も活版なら印刷できる！とのことで現在は3台の活版印刷機がメインとなって、印刷を行っています。依頼されるものは幅広いですが、主には、凸版印刷でのし箱の印刷等を行っているんだとか。

取材日 2026年9月28日

残った理由は『のし箱』にあり！

ONEのし箱が、会社を救った…？



松美堂活版印刷所が活版印刷を続けてきたのは、ただ伝統技術を守ろうとしただけではないといいます。

初めのお仕事は、お客さんの名札のフレームの枠を活版で印刷してる時代も。なぜ残り続けて来れたのか。その理由は、『のし箱への印刷に活版が適していた』から。

仕事として必要だったため、機械を手放さずに使い続け、現在でも、活版印刷機が動かない日はほとんどないそうです。

これは活版印刷機を持っている他の印刷所でも珍しいことなのだとか。

しかし、毎日機械が動いているからといって、経営は簡単というわけではなく…機械の調整や修理、電気代、人件費。印刷するまでに要する準備の時間は30分以上かかることも。

コピー機なら数分で印刷できるものでも、活版印刷ではそう簡単にはいきません。

「残そうとして残した」のではなく、「必要だったから残った」。

その偶然が、今の松美堂活版印刷所の新しい挑戦につながっています。

昔の「失敗」が、今の「かわいい」に

03｜へこんでるのに、褒められた。



今では活版印刷の魅力として知られる、紙に残る凹凸。

しかし、昔から活版印刷を続けてきた職人にとって、それは必ずしも良い印刷ではありませんでした。

本来、印刷とは同じものを正確に再現する技術。紙が大きくへこんだり、裏側に影響が出たりすることは、技術的には避けるべきものだったのです。

だからこそ、強く押した印刷を求められると、職人からは「そんなに押すの？」という戸惑いの声が上がることも。

一方で、デザイナーやお客さんにとっては、その凹凸こそが魅力になる。

松美堂活版印刷所では、こうした異なる価値観が交わりながら、活版印刷の新しい可能性を探っています。

かつての正解が、今の正解とは限らない。

技術を知り尽くした職人だからこその葛藤も、活版印刷の現在を物語っています。





制作したコースター
『お豆さん』
触ってみるとかなりの凹凸！
温かみのある存在感を放っています

公式オンラインショップでは活版印刷を用いて作られたさまざまな雑貨や文具がチェックできます！

わたしの活版おし語り

活版によって生まれる感情をこれからも残し続けたいby松美堂活版印刷所

のし紙とかコースターとか、色々な素材が出てきたけど・・・

活版印刷って何を印刷できるの？





とりあえずやってみる！

最近は、これまでにない印刷表現を求める相談が寄せられているんです。
例えば、漆を塗った紙に活版印刷をしたいという依頼。通常の紙とは異なる素材に、インキはきちんと乗るのか。何色がいいのか？樹脂版と亜鉛版では何が違うのか。
実際に試してみなければわからないこともはたくさんです。
職人たちからは「そんなところに印刷できるわけがない」という声が上がることもありますが、うちはこうした相談を歓迎しているんですよ笑
自分たちにとっても、新しい技術や表現を発見するきっかけにな流と思っているんです。

お仕事の中で大切にしていることは？



↑『活版ミャー』
一度の印刷で、同じ黒色でも版の作りによっては色の濃淡を変えることができるという活版印刷の新しい魅力を伝えるために作成したカード

押すことよりも、想うこと

印刷物を作るとき、私たちが大切にしているのは、「誰が、誰に、何を伝えたいのか」同じ名刺でも、信頼感を伝えたいのか、親しみを感じてほしいなどによって、選ぶ紙や色、文字、印刷の強さは変わります。お客さん自身も、最初から自分の想いをうまく言葉にできるとは限らない。
だからこそ対話を重ねながら、言葉になっていない気持ちを探し、紙や文字、余白、印刷方法を置き換えて触れられるモノに翻訳していきます。
活版印刷は、ただ文字を紙に刷るためだけの技術ではなく、想いを届けるための表現方法の一つなんだと思っています。



これからどんなことに挑戦したい？

積極的に工場の外に出る！



これまでは依頼された印刷物を作る仕事が中心だったのですが、近年は、都内の活版イベントやファッションブランドとの合同展示など、工場の外へ出る機会が増えてきました。当たり前に行ってきた活版印刷の技術に対して、イベントの来場者から思いがけない反応が返って来ることもあるんです。
そんな発見は、「こんなのがウケるんだね～！」と、職人たち自身が活版印刷の価値を見つめ直すきっかけにもなっているなぁと実感しています。
技術を使うだけではなく、『活版印刷』という魅力を自分たちから発信していく存在へと変わっていきたいですね。

